

第5講

「本格的」には意味がある ー 第一次大隈重信内閣と原敬内閣の違いー (2008年度第4問)

1898年に成立した第一次大隈重信内閣は、はじめての政党内閣と呼ばれ、1918年の原敬内閣の発足は、本格的な政党内閣の成立と言われている。

この二つの内閣についての、下記の設問A・Bに答えなさい。

設問

- A 二つの政党内閣が成立した事情は、どちらも戦争と深く関わっている。第一次大隈重信内閣について、その成立と戦争との関連を、2行(60字)以内で説明しなさい。
- B 原敬内閣が、第一次大隈重信内閣とは異なり、のちの「憲政の常道」の慣行につながる、本格的な政党内閣となったのはなぜか。その理由を、社会的背景に留意しながら、4行(120字)以内で説明しなさい。

解いてみましょう (第5講) Aについて

1 問われている (求められている) ことを確認する。

ア (ア) が成立した (イ) を書く。

イ (ウ) との関係を踏まえて書く。

ウ 2行 (60字) 以内で書く。

2 教科書の関係するページと内容を確認する。

『詳説日本史』(山川出版社) 291 ページの 21 行目～292 ページの 8 行目



日清戦争の勝利と三国干渉は、政府と政党の関係を大きく変化させた。自由党は第2次伊藤博文内閣を公然と支持して板垣退助を内相として入閣させ、軍備拡張予算を承認し、1896(明治29)年にそのあとを継いだ第2次松方正義内閣も、進歩党と提携して大隈重信を外相として入閣させ、軍備を拡張した。しかし、1898(明治31)年に成立した第3次伊藤内閣は、総選挙でのび悩んだ自由党との提携をあきらめて超然主義に戻った。これに対し、自由・進歩両党は合同して憲政党を結成した。衆議院に絶対多数をもつ合同政党の出現により、伊藤内閣は議会運営の見通しを失って退陣し、かわってのはじめての政党内閣である第1次大隈内閣(隈板内閣)が成立した。

『日本史B新訂版』(実教) 256 ページの 1 行目～13 行目



藩閥政府と政党との接近は、日清戦争以前からはじまっていたが、開戦すると政党は政府攻撃をやめ、日清戦争後には提携関係に発展した。第2次伊藤博文内閣は自由党と提携して党首板垣退助を内相とし、続く第2次松方正義内閣は進歩党の大隈重信を外相にすえた(松隈内閣)。こうした提携は、大軍拡を中心とする日清戦争後の積極的政策を遂行するために、議会の支持が必要だったことによる。しかし、大軍拡の財源として地租増徴が問題になると、地主を支持基盤とする政党はこれに応じられず、1898(明治31)年1月に成立した第3次伊藤内閣提案の地租増徴案を自由・進歩両党は結束して否決し、その後合同して憲政党を結成した。

この結果、同年6月、伊藤内閣は総辞職し、最初の政党内閣である第1次大隈重信内閣(隈板内閣)が成立して、大隈首相、板垣内相以下、軍部大臣以外は政党人が大臣を占めた。

3 教科書記述をもとに作成した「東大チャート」を解く。

(次のページには、このページの空欄の部分も記されています。)

東大チャート 「第1次大隈内閣が成立した事情と戦争の関係」(2008年度第4問設問A)
 (へは、ほぼ抜き出して入れる。 には、考えてキーワードを入れる。)

ア (7) **第1次大隈重信内閣** が成立した (イ) **事情** を書く。

イ (ウ) **戦争** との関係を踏まえて書く。

【山川『詳説日本史』の記述】

自由党は第2次伊藤博文内閣を公然と支持して板垣退助を内相として入閣させ、軍備拡張予算を承認し、1896(明治29)年にそのあとを継いだ第2次松方正義内閣も、進歩党と提携して大隈重信を外相として入閣させ、軍備を拡張した。しかし、1898(明治31)年に成立した第3次伊藤内閣は、総選挙でのび悩んだ自由党との提携をあきらめて超然主義に戻った。これに対し、自由・進歩両党は合同して憲政党を結成した。衆議院に絶対多数をもつ合同政党の出現により、伊藤内閣は議会運営の見通しを失って退陣し、かわってのはじめての政党内閣である第1次大隈内閣(隈板内閣)が成立した。(PP. 291 L21~292 L8)

【実教『日本史 B』の記述】

藩閥政府と政党との接近は、日清戦争以前からはじまっていたが、開戦すると政党は政府攻撃をやめ、日清戦争後には提携関係に発展した。第2次伊藤博文内閣は自由党と提携して党首板垣退助を内相とし、続く第2次松方正義内閣は進歩党の大隈重信を外相にすえた(松隈内閣)。(略)

こうした提携は、大軍拡を中心とする日清戦争後の積極的政策を遂行するために、議会の支持が必要だったことによる。しかし、大軍拡の財源として地租増徴が問題になると、地主を支持基盤とする政党はこれに応じられず、1898(明治31)年1月に成立した第3次伊藤内閣提案の地租増徴案を自由・進歩両党は結束して否決し、その後合同して憲政党を結成した。この結果、同年6月、伊藤内閣は総辞職し、最初の政党内閣である第1次大隈重信内閣(隈板内閣)が成立して、大隈首相、板垣内相以下、軍部大臣以外は政党人が大臣を占めた。(P. 256 L1~13)

日清戦争後、①は
②に備えて ③
 を進めるためには議会の支持が必要だった。その
 ため ①は政党と提携した。
 しかし、政府が ③の財源と
 して ④を ⑤する
 と、これに反対した ⑥と
⑦は合同して ⑧を
 結成し、 ⑨に ⑩
 をもつ政党が出現した。



4 60字に要約する。

解いてみましょう（第5講）Bについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア が になった理由を書く。

イ に留意して書く。

ウ との関係を踏まえて書く。

エ につながったことを踏まえて書く。

オ 4行（120字）以内で書く。

2 教科書（実教出版『日本史B新訂版』）の関係するページと内容を確認する。
関係する教科書のページと内容は、

教科書の **282 ページの1行目～3行目、13行目**



大戦中の経済発展は、その後の社会の質を大きくかえた。(略)生活水準の上昇は、人々の教育や文化への欲求をうんだ。

教科書の **283 ページの10行目～20行目**



都市化にともなう人々の生活水準の上昇は、人々の向上心を刺激し、逆に生活の現状への不満もかきたてた。それが、世界的な民主化の流れや、ロシア革命の影響もあって、社会運動の急速な発展につながった。

1918年夏、シベリア出兵のための米の買い付けが米価の高騰に拍車をかけると、7月下旬、富山県魚津町で「越中女房一揆」とよばれる騒擾がおきたとの報道をきっかけに、8月から9月上旬にかけて米の廉売を求める騒擾が全国にひろがり、なかには軍隊の出動にまで発展したところもあった(米騒動)。そしてこの事件が、それ以降の社会運動の発展のきっかけとなった。

教科書の **289 ページの 1 行目～13 行目**



第一次世界大戦は、ロシアやドイツをはじめ多くの国の君主制を崩壊させた。その一方でアメリカの参戦の結果、民主主義の権威を高めることになった、さらに社会運動のひろがりなどもあって、日本でも、吉野作造が民本主義を提唱して以来、大戦中から大戦後にかけて民主主義を世界の大勢として受けとめる考え方がひろがった。

二個師団増設が実現すると、第2次大隈内閣は山県有朋ら元老たちの支持を失い、超然主義を標榜する寺内正毅内閣に席をゆずったが、民主主義の流れはそれをゆるさなかった。当時流行していたビリケン人形にことよせて「ビリケン（非立憲）内閣」と非難された寺内内閣は、1918年におきた米騒動の責任を問われて総辞職し、同年9月、立憲政友会総裁原敬のひきいる、陸・海軍大臣、外務大臣以外のすべての閣僚を政友会員で占める、本格的な政党内閣が誕生した。

教科書の **290 ページの 12 行目～291 ページの 1 行目**



1924年1月、貴族院に基礎をおく清浦内閣が成立すると、憲政会・政友会・革新倶楽部が護憲三派連盟を結成し、特権内閣打倒・政党内閣実現をめざして第2次護憲運動にたち上がった。政友会の一部は分裂し床次竹二郎を中心に政友本党をつくり政府支持にまわったが、同年5月の総選挙では、普通選挙の実現と貴族院改革を唱えた護憲三派が圧勝した。その結果、清浦内閣は倒れ、第1党となった憲政会の総裁加藤高明を首相に、政友会の高橋是清、革新倶楽部の犬養毅を加えた護憲三派内閣が誕生した。これ以後、1932年の五・一五事件で犬養政友会内閣が倒れるまで、衆議院に多数の議席を占める政党の総裁が交互に政権を担当する政党政治の慣行が成立し、それが「憲政の常道」と理解されるようになった。

3 与えられた資料と教科書の記述から抜き出して作成した「東大チャート」を解く。

次のページに「東大チャート」があります。上記の「関連する教科書のページと内容」からの抜粋も記されています。

※ 問われている（求められている）ことを確認する。

ア (ア) **原敬内閣** が (ロ) **本格的な政党内閣** になった理由を書く。

イ (ウ) **社会的背景** に留意して書く。

ウ (エ) **戦争** との関係を踏まえて書く。

エ (オ) **憲政の常道** につながったことを踏まえて書く。

東大チャート「原敬内閣が本格的政党内閣になった理由」(2008年度第4問設問B)
(へは、ほぼ抜き出して入れる。へは、考えて「決めぜりふ」を入れる。)

第一次世界大戦は、ロシアやドイツをはじめ多くの国の君主制を崩壊させた。その一方でアメリカの参戦の結果、民主主義の権威を高めることになった、さらに社会運動のひろがりなどもあって、日本でも、吉野作造が民本主義を提唱して以来、大戦中から大戦後にかけて民主主義を世界の大勢として受けとめる考え方がひろがった。

二個師団増設が実現すると、第2次大隈内閣は山県有朋ら元老たちの支持を失い、超然主義を標榜する寺内正毅内閣に席をゆずったが、民主主義の流れはそれをゆるさなかった。当時流行していたビリケン人形にことよせて「ビリケン(非立憲)内閣」と非難された寺内内閣は、1918年におきた米騒動の責任を問われて総辞職し、同年9月、立憲政友会総裁原敬のひきいる、陸・海軍大臣、外務大臣以外のすべての閣僚を政友会員で占める、本格的な政党内閣が誕生した。

(PP. 289 L1~13)

大戦中の経済発展は、その後の社会の質を大きくかえた。(略)生活水準の上昇は、人々の教育や文化への欲求をうんだ。

(P. 282 L1~3, L13)

都市化にともなう人々の生活水準の上昇は、人々の向上心を刺激し、逆に生活の現状への不満もかきたてた。それが、世界的な民主化の流れや、ロシア革命の影響もあって、社会運動の急速な発展につながった。

1918年夏、シベリア山兵のための米の買い付けが米価の高騰に拍車をかけると、7月下旬、富山県魚津町で「越中女房一揆」とよばれる騒擾がおきたとの報道をきっかけに、8月から9月上旬にかけて米の廉売を求める騒擾が全国にひろがり、なかには軍隊の出動にまで発展したところもあった(米騒動)。そしてこの事件が、それ以降の社会運動の発展のきっかけとなった。

(P. 283 L10~20)

① は、ロシアやドイツをはじめ多くの国の君主制を崩壊させた一方で、参戦したアメリカの権威を高めた。そのため日本でも② を世界の大勢として受け止める考え方がひろがった。

さらに大戦中の経済発展(大戦景気)による③ の進展と④ の上昇は、人々の向上心を刺激し、生活の現状への不満もかきたて、民衆の⑤ への要求が高まった。

シベリア山兵のための米の買い付けが米価の高騰に拍車をかけると、全国で⑥ の騒擾が起こり、「ビリケン(非立憲)内閣」と非難された超然内閣(寺内内閣)は、責任を問われて総辞職に追い込まれた。この状況に対して元老は⑦ ため

⑧ の⑨ の総裁である原敬を首相とする内閣を成立させた。

1924年1月、貴族院に基礎をおく清浦内閣が成立すると、憲政会・政友会・革新倶楽部が護憲三派連盟を結成し、特権内閣打倒・政党内閣実現をめざして第2次護憲運動にたち上がった。(略)同年5月の総選挙では、普通選挙の実現と貴族院改革を唱えた護憲三派が圧勝した。その結果、清浦内閣は倒れ、第1党となった憲政会の総裁加藤高明を首相に、政友会の高橋是清、革新倶楽部の犬養毅を加えた護憲三派内閣が誕生した。これ以後、1932年の五・一五事件で犬養政友会内閣が倒れるまで、衆議院に多数の議席を占める政党の総裁が交互に政権を担当する政党政治の慣行が成立し、それが「憲政の常道」と理解されるようになった。(PP. 290 L12~291 L1)

抜き出したものをまとめる

① によってロシアやドイツをはじめとする多くの国の君主制が崩壊し、参戦したアメリカの権威が高まるなどの ⑩ により、日本でも ② を世界の大勢として受け止める考え方がひろがった。

さらに大戦中の経済発展（大戦景気）による ③ の進展と ④ の上昇は、人々の向上心を刺激し、生活の現状への不満もかきたて、民衆の ⑤ への要求が高まった。

シベリア山兵のための米の買い付けが米価の高騰に拍車をかけると、全国で ⑥ の騒擾が起こり、「ビリケン（非立憲）内閣」と非難された超然内閣（寺内内閣）は、責任を問われて総辞職に追い込まれた。この状況に対して元老は ⑦ ため ⑧ の ⑨ の総裁である原敬を首相とする内閣を成立させた。



4 120字に要約する。

今回、問題を解くことで学んだこと